第一回ニッポン放送青春文芸賞受賞

キューピックの午後

佐々寿美枝

8 BEAT エイトビート

第二回ニッポン放送青春文芸賞受賞

キューピッドの午後

佐々寿美枝

第二回ニッポン放送青春文芸賞
受賞作品集
キュービックの午後
昭和56年5月30日　1刷

定価　九八〇円

著者　佐々寿美枝他
編者　株式会社ニッポン放送
企画　エイトビート
発行所　株式会社サンケイ出版
東京都千代田区大手町一の七の二（〒100）
TEL（東京）二三一一七一一一（代）
大阪市北区梅田二の四の九（〒530）
TEL（大阪）三四三一一二二一（代）

印刷　東洋総企
製本　田中製本

*万一、乱丁・落丁の場合はお取替えいたします

©ニッポン放送 1981 Printed in Japan.0093-811816-2756〈検印省略〉

第二回ニッポン放送青春文芸賞受賞作品集

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

目

次

第二回ニッポン放送青春文芸賞

キュービックの午後　佐々寿美枝……7

優秀賞

バラ色の山のくぼみ　本吉洋子……45
メージャー・セヴンス　高田融……79

佳作

純情派航路　一条由紀駛……115
日溜りの詩　飛火野湊一……151
誕生日　住友浩……185

選考委員紹介……224
作者紹介……226
第三回　ニッポン放送青春文芸賞　応募要項……231
あとがきにかえて……235
応募者全氏名……238

キュービックの午後

佐々寿美枝（ささすみえ）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

四丁目のスクランブル交差点で、二年ぶりの治に逢ったのは、三月中旬だというのに、小雪のちらつく寒い日曜日だった。

「湘子ちゃん？　久しぶり……僕、コートもなくてね。ひどい格好でしょ」

治は足ぶみをしながら、少し恥ずかしそうに下を向いた。見覚えのある黒のセーターにグレーのマフラー、二年前と同じ無駄な肉片の一グラムもついていない足に、ブリーチアウトのジーンズが良く似合っている。

用事があるのかと聞くので、夕方人に逢うと言うと、丁度いいと治は喜んだ。

「知ってる？　アベニュー、ほら〝ノア〟のボーカルだった阿部、あいつ少し東京でやってみる事になってね。千歳行き、三時のバスで出発なんだ。君を連れて行ったら、あいつびっくりするなあ」

途中、果物屋と本屋に立ち寄った。

「あいつ、りんご好きなんだよ」

とか、

「クリスティに、平井和正」

とか言いながら、餞別らしい買物をした。文庫本と果物という取り合わせは、まるで病人の見舞いのようだったが、湘子は黙っていた。

「学校、卒業した？」
二度めの信号が黄色から赤になり、立ち止まった時、治が聞いた。
「どうにか、今月初めに。結局、三年行ったわ」
初めて治に逢った時、湘子は短大の美術科の一年で、彼も北大の何度めかの一年だったが、二人ともほとんど大学には行っていなかった。
「朝倉さんはどうしたの？　大学……」
「だらだら行っても意味がないような気がして、やめたよ。去年」
「退学したの……そう……今はどうしてる？　まだ歌っているの？」
「相変わらず。一週間に五日歌って、あとはパチンコしてる」
「東京からいつ帰ったの？」
信号が青になった。
「東京？　あれから半年くらいしてすぐ帰って来たよ。帰って来て何度か君に逢いたいと思ったけど、店にも来てくれなかったし……」
「あの時はびっくりした。ラウンド・エスケープがやってるのに、ボーカルとってるのはアベニューなんだもの」
「東京でやっていける気もしたけど、なんとなく札幌に帰って来ちまった……やっぱり、俺、ラ

ウンド・エスケープのみんなとやっていたかったのかもしれない。スタジオ・ミュージシャンにはなりきれないのかもしれない」

角の電機店からのポリスの〝白いレガッタ〟が風の歌のように流れてきた。

自動ドアが開くと、日航営業所のロビーには色が氾濫していた。赤・黄色・青・そしてパステルカラーのスキーやスキー・ウエアー。クナイスル、ロシニョール、誰かがイモニョールなんて言ってた、ヤマハにミズノ、カザマ。札幌までスキー・ツアーでやって来たカラフル軍団が帰ろうとしている。そして、その団体よりまったく違った意味でひときわ目立っているグループがいた。

「治！　こっち、こっち。遅かったなあ」

二十人ほどの懐かしい顔がそこにあった。

「ごめんな。ちょっと遅れたかわりにな、こんな素敵なお餞別連れて来たよ」

湘子はちょっと照れて、ごぶさた——とおじぎをした。

「えっ？　ああ——湘子ちゃん！　ほらT美に行ってた——」

「うそ——あれ、そうだ湘子ちゃん！」

「ほんと！　湘子ちゃん、どうしてた？」

肩をつかれたり、頭をたたかれたりしたが、みんな喜んでくれてる。
「おい、一体誰の見送りだよ」
治は自分のまいた種なのに、そんな風に驚きの声をあげた。
「阿部君、東京でもがんばってね」
湘子は何年も逢っていない、そして阿部君だからアベニューと呼ばれていた事しか知らないその青年に言った。
「ありがとう、湘子ちゃん。できたら——またペニーにも行ってやってよ。治が喜ぶから……」
「わかったわ、行くようにする」
彼も湘子の苗字をきっと知らない。

千歳行きのバスが走り去った並木道は湘子の一等お気にいりの道だ。今は雪をあしらった真白な並木道だが、五月には緑の並木道になり、秋には葉を落とす前のイチョウが黄色の並木道を作り、そして、つきあたりにある道庁の赤レンガとのコントラストが、どの季節も美しい。
「この道——いつもいいね」
もうバスは見えなくなっているのに、まだ手をあげたままの治がつぶやく。
私も……と続けようと思うと、彼の仲間たちが、もう時間だと治に言う。デートはこの次にし

なよ、とか言いながら。

「スタジオ、借りてあったんだ。たまには練習もするんだよ」

治は電話番号を聞き、今度電話すると言い残して、連中と一緒に交差点を渡り始めた。湘子が反対側の信号が変わるのを待っていると、交差点を渡った治が叫んでいる。

「湘子ちゃーん！　今日はありがとう！」

連中も笑いながら手をふっている。湘子は手をふりながら、どうして二年前、この仲間たちから離れてしまったのかを考えていた。

——穴ぐらみたい——高校時代の男友だち二人と彼らがよく行くペニーというライブハウスに初めて行った時、湘子は人さし指でテーブルをふくと、うっすらほこりがつきそうな男くさい店を眺め、ため息をついた。

次に出るバンドのボーカルが、彼らの中学の先輩だと言うので、一応湘子はステージに目をやった。ステージといっても、ただの空間で、一番前のテーブルの湘子たちとは、目と鼻の先だ。グループの名を「ラウンド・エスケープ」と言った。変な名をつけたものだと思っていると演奏が始まった。

アフリカまでジープで行って、そのあと、おまえの胸の中で死んでいきたいというような内容

の詩を、その先輩だというボーカルの男は歌っていた。黒のジーン・パンツにスニーカー、白のボタン・ダウン。その男はどこか少年ぽく、高校生のようだったが……笑わないでほしいけど……湘子は王子様を見た思いだった。完全に一目でいかれた。白い馬に乗って王子様が迎えに来るという憧れを、とうに忘れた湘子の前に、プリンスはマイクを右手に現れた。

——一目惚れなんて、もうすぐ十九になるのに——中学生に笑われそうだ。

「これ、朝倉さんの曲」

呆然としている湘子に友だちが教えてくれる。さっき、〝オサムー〟と声援がとんでいた。プリンスはどうやら、朝倉オサムというらしい。

「朝倉さん、ギターも最高なんだ」

彼は一曲めのジープの歌を歌い終わり、ギターをチューニングしている。次はイーグルスの〝ホテル・カリフォルニア〟。ギターはまるで、恋に破れた女のすすり泣きのようだった。湘子は今までの自分が何処かへ飛んで行くような不安を、熱いときめきとまぜこぜに感じていた。

「湘子、灰が落ちるよ」

煙草はほとんど吸っていないのに、いつのまにか灰になっていた。

もう一曲、イーグルスのナンバーをやって、オリジナルを三曲ほど続けて、ラウンド・エスケープは、最初のステージを終えた。友だちが彼らを手招きすると、ラウンド・エスケープの面々

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co